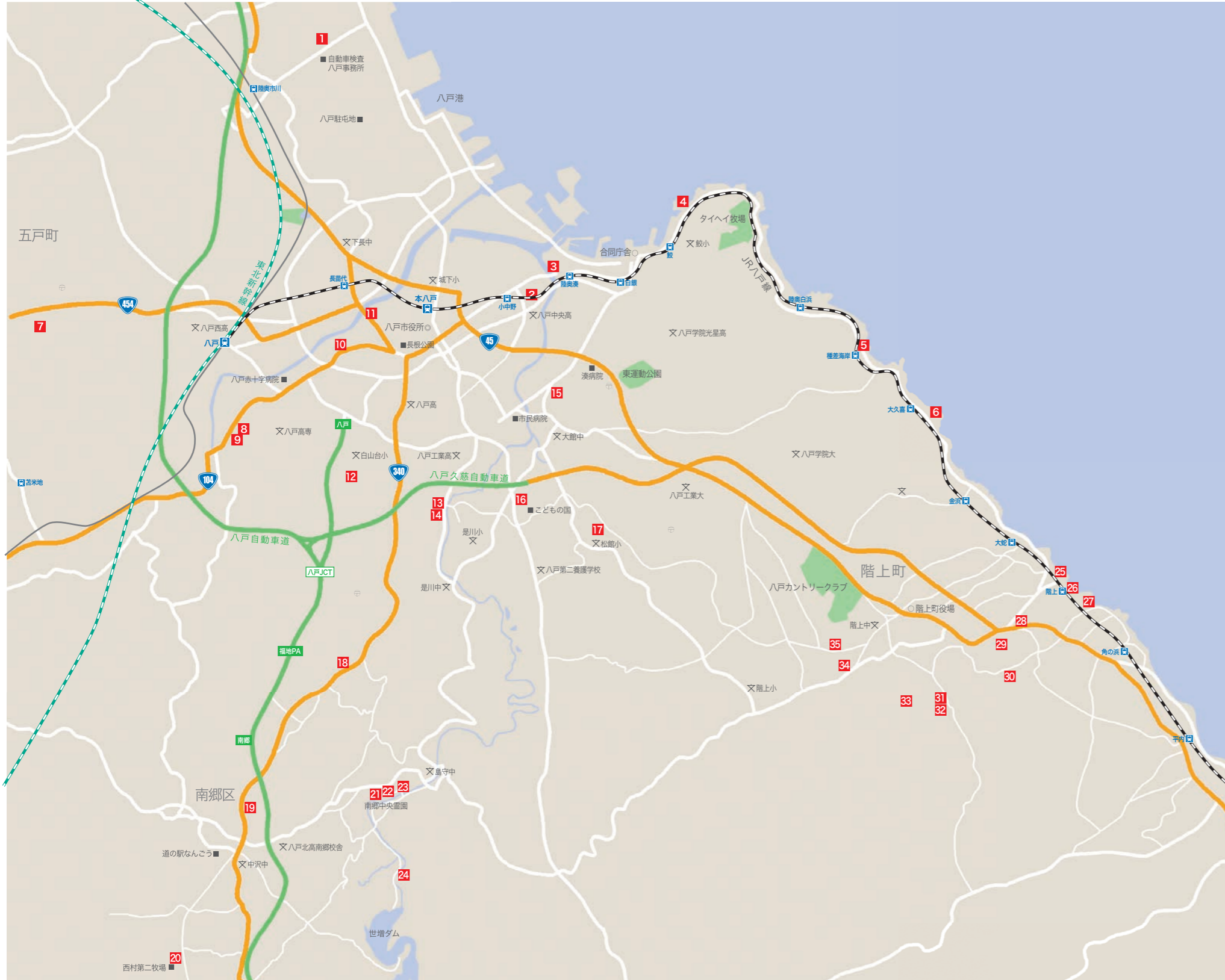


八戸広域～階上町



八戸市

長七谷地貝塚 1

主に海水産のハマグリや汽水産のヤマトシジミなど砂泥に棲む貝類の堆積がみられる貝塚で、縄文時代早期後半のもので、魚骨や鳥獣骨のほかに、軸と針を組み合わせた釣り針、鉾、縫い針、ヘアピンなどに加工した骨角製品も出土しています。

縄文時代の自然環境や生業の様子を知るうえで貴重な貝塚であり、昭和56年に国史跡に指定されました。

新むつ旅館本館 2

新むつ旅館は、明治28年に開設された小中野新

地の遊郭街に、前身である新陸奥楼が開業したのが始まりです。昭和32年に炉端脇に帳場を新設し、遊郭から旅館に衣替えしました。戦後まもなく、唐破風をもった玄関に改装され、ほぼ現在の姿になりました。平入の木造2階建てで、中央に天窓を開けた吹抜と洋風意匠のY字状階段を設け、たちが高く、1階軒先部の細工や2階軒の出桁上に照明を付けた独特のつくり特徴があります。



八戸酒造 3

八戸酒造は、「陸奥八仙」「陸奥男山」を造る蔵元です。国登録有形文化財に指定されている、店舗兼主屋・北蔵・文庫蔵・西蔵・煉瓦蔵・煉瓦堀の建物群があります。大正年間に駒井酒造店として建設されたものです。



蕪島 4



ウミネコの繁殖地として、国の天然記念物に指定されています。毎年3月上旬頃に数万羽のウミネコ

が産卵のために飛来し、南方に旅立つ8月上旬まで、ウミネコの鳴き声が響き渡ります。5月中旬頃には、島全体に咲き誇る蕪の花の黄色とウミネコの白とが織りなす見事なコントラストを楽しむことができます。

【蕪島神社】



蕪島の頂にある蕪島神社は、永仁4年(1269)の創建と伝えられ、弁財天を奉っています。創建当初は「葦島神社」と呼ばれていたが、平成3年に「蕪島神社」に改名されています。八戸藩3代藩主南部通信が社殿を改築し男子誕生の子宝祈願を行ったところ見事念願成就させたことから、南部家の御紋の向鶴を社紋として授けられました。

種差海岸 5

鮫町の蕪島を起点として南東に伸びる海岸線は、白砂青松、大小の岩礁、小島が交互に続きます。また、高山植物と、海浜植物の宝庫であり、春から秋にかけては、ニッコウキスゲなどの美しいが咲き誇ります。広大な天然の芝生が波打ち際まで広がる種差天然芝生地、鳴砂の大須賀浜、ウミネコの大繁殖地である蕪島が代表的な場所です。平成25年に、三陸復興国立公園に指定されました。



浜小屋 6

八戸の沿岸などでかつて使用されていた漁撈用具で、1,383点が国の重要有形民俗文化財に指定されています。種差海岸の最も南にある大久喜地区の浜小屋と収蔵庫に保管されています。



七崎神社 7

かつては、修験の大規模な拠点寺社で、十和田湖の主となった南祖坊が修行したと伝えられています。江戸時代の周辺の様子が分かる史料として、「新撰陸奥国誌」にも描かれています。



境内はモミなどの大木と杉木立に囲まれ、3本の杉の巨木(市天然記念物)が有名です。それぞれ高さ40m、38m、36mを測り、最も太い杉の胸高周囲は、9.7mもあります。推定樹齢は800～1000年とされ、神社の草創に関わる木ともいわれ、神社の神木となっています。



櫛引八幡宮 8

櫛引八幡宮は南部家初代光行の草創と伝えられています。建久2年(1191)、光行が糠部郡へ入部し、後に家士を遣わして、甲斐南部郷(現在の山梨県)の八幡宮御神体を奉持せしめ、四戸の櫛引村に宮社を造営し武運長久を祈ったといわれています。これが櫛引八幡宮であり、その後南部の総鎮守となっていきます。なお、櫛引に移る前には十和田市の滝沢にあったという伝承もあります。



八戸市民や周辺町村・岩手県北の人々から厚い信仰を受け、「南部一ノ宮」「やわたの八幡様」と呼ばれ親しまれています。旧暦九月中旬の例大祭では流鏝馬も行われ、正月の元朝参りには多くの参拝客が訪れます。また、国宝の鎧・兜や重要文化財の社殿など多数の文化財を所有しています。

【重要文化財・県重宝(建造物)】

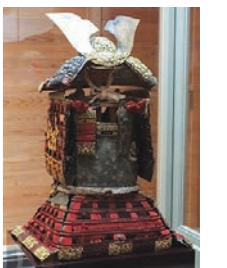
現在の社殿は、盛岡南部28代重直が正保2年(1645)から慶安元年(1648)にかけて建立されたもので、その後、南部藩の手で何度か補

修工事も行われてきました。本殿、旧拝殿、末社神明宮、末社春日社、南門の5棟は、それぞれ特徴ある建築様式で造られており、江戸時代前期の社殿形態を伝える貴重な遺構として国の重要文化財に指定されています。また、敷地内にある県重宝「旧八戸小学講堂」は、明治14年(1881)に、八戸小学の講堂として現八戸市庁前ロータリー付近に建てられたものを移築したものです。

【櫛引八幡宮国宝館】

国宝「赤糸威鎧(あかいとおどしよるい)」ほか重要文化財・県重宝・市文化財など計25点の文化財を収蔵・展示しています。

赤糸威鎧は、鎌倉時代の作で随所に八重菊模様の金具を散らし、兜と大袖に力強い「一」文字があることから「菊一文字の鎧兜」と呼ばれ、当時の金工技術の最高水準を示すものです。



旧八戸小学校講堂 9

県重宝(建造物)。小学校の講堂として、明治14年に竣工した2階建寄棟造の建造物です。構造形式は、外観の意匠や構成には洋風を取り入れな

がらも、架構方法や小屋組は和風の伝統的技術を用いる木造擬洋風建築です。設計は地元の大工関野太次郎、棟梁は藩大工の流れを汲む青木元次郎であることが資料によって知られています。昭和4年(1929)に移築し、八戸市図書館として使われた後、昭和37年(1962)には保存を目的として現在地に移築復原されています。

